

## 論文の内容の要旨

論文題目 日本語の自動詞構文と他動詞構文の習得：空間概念の場合

氏名 鈴木 陽子

本研究は、統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの立場を比較し、自然発話データから得られた自動詞と他動詞の発話を分析することによって、どちらのアプローチがより妥当であるかを検証した。2つの理論は、動詞を学習するプロセスに言語的コンテキストが重要である点では共通しているが、動詞習得のプロセスや動詞の語彙知識・構文知識に対しては異なる考え方を持っている。

本論では、8人の子どもとその養育者の自然発話データを対象に、ペアを成す6つの自動詞「あく/しまる/はいる/でる/のる」と6つの他動詞「あける/しめる/いれる/だす/のせる」の計12の動詞を対象に自動詞文と他動詞文の習得について以下の3つの研究課題を取り上げ、分析を行った。

研究課題1：自然発話における自動詞と他動詞の使用、動詞の習得過程の記述

研究課題2：自動詞と他動詞の区別

研究課題3：自動詞と他動詞の誤用の分析

研究課題 1 については第 4 章と第 5 章で、研究課題 2 については第 6 章で、研究課題 3 については第 7 章で論じている。

第 4 章では、ペアを成す自動詞と他動詞の養育者と子どもの使用全体の特徴を分析した。自動詞と他動詞の使用頻度では、「あくーあける」以外の動詞について、自動詞の方が有意に使用頻度が高い傾向が確認された。日本語では、格助詞が頻繁に落ち、動詞の必須要素となる名詞句が省略されることが多いが、本研究の分析データについても同じ特徴を養育者と子どもの両方の発話において確認した。全体の約 50%の発話が、名詞句がまったく現れない発話であり、格標示される名詞句が現れる発話は非常に少なかった。本研究では、動詞が活用された形を特定の意味と形式を持った構文として捉え、それぞれの動詞が生起する構文のパターンを分析した。その結果、頻繁に使用される動詞形には自動詞と他動詞との間に違いがみられた。自動詞では結果状態を表すテイル形やタ形などが頻繁に使用され、他動詞では相手に行為を要求するテ形や意思形などの動詞形が頻繁に使用されていた。ペアを成す自動詞と他動詞の出現頻度に有意差があること、さらに自動詞と他動詞とでは頻繁に使用される動詞形の種類において異なる特徴がみられることから、自動詞と他動詞の非対称的な言語使用を確認することができる。また、このような特徴は、養育者と子どもの両方の発話に共通して見られた。これは、子どもが耳にするインプットが非対称的な特徴を持っており、子どもはそのような特徴を持ったインプットから統計的学習を行い、それぞれの動詞を学習していくことを示唆している。

第 5 章では、6 つの自動詞と他動詞のペアについて、子どもがどのような形式と意味から発話を開始し、どのように複雑な言語知識を発達させていくのかを分析した。まず、対を成す自動詞と他動詞はほぼ同じ時期に使用され始める。そして、それぞれの動詞が生起する構文に着目すると、頻繁に使用されている構文の多くが、初期に習得されていたものだった。このことは、子どもがインプットにおいて頻度が高く、際立ちの高い形式に基盤を置き、学習を進めていることを示唆している。言語発達が進むと、子どもは同じ動詞についてさまざまな構文を用いて文を作ることができるようになることも観察された。

第 6 章では、第 4 章で得られた子どもと養育者の動詞の使用にみられる特徴を踏まえ、どのような情報を手がかりにして子どもが自動詞と他動詞の意味と形式の区別をし、学習することが可能かという問題について分析と考察を行った。文法関係を明示する格標識は、自動詞構文であるか他動詞構文であるかを判断するために有効な情報であるが、養育者の言語使用のなかでは、使用頻度が低く、特に目的格を標示する格助詞「を」は発話のなかにほとん

ど登場しないため、このような区別のための手がかりとしては有力な候補であるとは考えにくい。自然談話のなかで交わされる発話の約半分がどのような名詞句も含まれない発話だという点を考慮すると、その鍵は構文にあると考えられる。

自動詞にと他動詞において頻繁に使用される動詞形には大きな違いがあるため、その情報をもとに 12 の動詞についてクラスター分析を行った結果、いくつかの問題は残るものの、おおよそ自動詞群と他動詞群との大きな違いを捉えることができた。この結果から、特定の動詞形の頻度分布が自動詞と他動詞との違いを区別するために有効であることが示される。動詞形は単純に形式とその頻度において特徴があるばかりでなく、自動詞が依拠するテイル形とタ形は結果状態を報告し、他動詞が依拠するテ形は行為要求を表すというように、それぞれの動詞形が持つ発話意図においても大きな違いがある。さらに、テイル形やタ形は、結果状態に焦点を当てる構文であることから、事態の変化が生じた後のタイミングで発話されるが、テ形や意思形などは事態の変化を求めるために、あらかじめ発話され、談話の時間の流れにおいて、事態の変化に対する出現位置が異なる。このようにしてみると、繰り返し使用されることで定着された頻度の高い自動詞、他動詞構文が、それぞれに重要な発話意図を持ち、さらに談話の流れにおいても役割分担をすることによって、子どもが対になる自動詞と他動詞のペアを習得していくことができるのだと考えられる。

第 7 章では、自動詞と他動詞の誤用について分析を行った。誤用には、「自他の誤り」、「格助詞の誤り」、「語彙選択の誤り」、「他の動詞形の代替」、「独創的な動詞形」、「言いさし」など大きく分けて 6 つの種類の誤用が観察された。自動詞を他動詞として使ってしまう誤りと他動詞を自動詞として使ってしまう誤りでは、どちらの方向の誤りも観察されたが、自動詞を他動詞として使用してしまう誤りの方が頻度が高かった。また、誤用が生じる構文は、テイル形やテ形など、それぞれの動詞で頻度の高い構文であった。このことは、誤用が生じるメカニズムの背後にインプットにおける頻度の分布や、より定着された構文かどうか関わっていることを示している。

自他動詞の誤用について、何についての誤りか、何については誤っていないかを考察すると、子どもは全く異なる発話意図を表す構文を使うような誤り（例えば、相手に何かしてほしい場合にテイル形を使うなど）はほとんど犯さないことがわかる。これは、子どもが自動詞か他動詞かという語彙の選択よりも、テイル形や意思形といった構文の形式とそれが表す発話意図をより重視し、定着した言語知識として持っていることを示している。

以上の分析結果と考察を元に、統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの 2 つを比

較すると、本研究は用法基盤モデルが得られた観察を説明する理論として符合すると結論づける。1 つには、用法基盤モデルが予測するように、日本語習得児の自動詞と他動詞の発話は、いくつかの具体的な構文を基盤にして始まっていた。子どもの初期の動詞は、2、3 の非常に限定的な構文において、限定的な対象に対してのみ使用されており、この時期の子どもの動詞に関する言語知識は、大人が持っているような知識とは大きく異なるを考える。統語的ブートストラッピングでは、刺激の貧困の考えから、不十分なインプットからでは適切な動詞の意味を推論することができないという前提に立っているが、本研究で観察した子どもたちは、インプットのなかで頻繁に使用されている極めて限定された構文を用いて動詞の使用を開始していた。その後、徐々に子どもは使用できる構文のタイプ数を増やし、さまざまな名詞と組み合わせて使用できるようになるが、その発達も統語的ブートストラッピングが予測するような早いものではなく、ゆっくりと進み、インプットで使用される構文を基盤として変化していく様子が観察された。このような観察は、動詞の学習プロセスにおけるインプットの役割を重視する用法基盤モデルの考え方と合致する。

また、本研究は、動詞が活用された形を特定の意味を持った「構文」として捉え、子どもの動詞使用の分析を行ったが、構文を単位として分析することによって、子どもの自動詞と他動詞の使用における特徴の違いをより明確に示すことができた。自動詞と他動詞とでは、頻繁に用いられる構文の種類に違いがみられ、そのような特徴を子どもは養育者から与えられるインプットから学習していると考えられる。頻度の高い構文は子どもの動詞使用の初期に現れ、その後の動詞学習の基盤となるため、このような構文の役割は動詞習得のプロセスを理解するうえで重要である。また、自他の誤りが多く生じる構文の種類においても、頻繁に使用されていた構文の存在が関わっており、語彙の発達プロセスと構文の発達プロセスとの関連について理解するための、重要なきっかけを与えている。自他の誤りが動詞を使用し始める 2 歳頃には現れず、3 歳前後になってから現れるのは、それまでの時期の動詞が活用された形の構文として学習されていたことを示していると分析した。このように自動詞と他動詞の誤用がなぜ 3 歳前後に現れ、なぜ特定の構文で現れるのかという問いについて、用法基盤モデルに基づく構文に着目した分析によって妥当な説明が与えられるのではないかと考える。